

主のかなしみをかなしむ

11月の最終週のいやし礼拝で、初めて「主の宮の基礎をすえた時」という新曲がさんびされました。翌週の起工式でも歌われたものです。

主はめぐみ深く、そのいつくしみはとこしえにイスラエルに絶えることがない。
(エズラ 3:11)

このさんびが与えられたのは11月14日、芦屋教会オープニング記念日でした。その頃、スタッフはネヘミヤ書を読んでいるので私も読もうと聖書を前にしたら、なぜかエズラ記を読みたいという思いになり、エズラを読み始めました。3章で「主の宮の基礎」という字が目飛び込んで来ます。風の教会の建設業者との契約ができるということがこの前日に知らされ、14日の聖研のあとに、起工式が12月3日の白いハト記念日に決まったことが皆に発表されたばかりだからでしょう。このみことばから主の宮の再建をする人々のさんびする声がひびいてきて、祈りの声のように感じました。

このメロディをICに録音したものを採譜している時、これは屋外で歌われるのに合うな、という思いがしました。それほどゆったりと朗々と歌われる曲だからです(それがやがて多くの人々のよろこびの声加わり、早くなり、アレルヤの大合唱になります)。

いやし礼拝の始まる前、私はさんび隊がこの曲を練習しているのを聞いていました。ゆったりと朗々と歌われているのですが、何ともかなしい。哀愁をおびているのです。宮の再建というよろこびの時にこの哀しみは何? と問いたいほどの旋律なのです。

さんび隊はこの曲のあと、「大きなよろこびを」を練習しました。クリスマスさんびです。このアレルヤは明るく、天空に明るいアレルヤがひびくという感じです。御子のお誕生のよろこびは特別なのでしょうか。それにしても、主の宮の基礎をすえる時のアレルヤは何とかなしいのか。なぜなんだろう。一つの疑問が私の内に残りました。

礼拝直前のことでした。舞台裏にいるさんび隊の前を通った時、ユキちゃん(洪田幸さん)が言いました。「新しいさんび(「主の宮の基礎をすえた時」)は、今までのさんびとは違うね。どんなに早くなくて、皆で歌っても、都もうでとは違う。新しい次元に入ったような気がする」

私は「エズラは今まで歌ったことがないからね(だから今までのとは違うのでしょう)」と言って、舞台の反対側の方へ去りました。そう言いながら私は、エズラだからではない、主が何か新しいことを開かれるためなのかもしれない と思いました。

すぐに礼拝が始まりました。三曲目に「主の宮の基礎をすえた時」のさんびを歌いました。一回目はゆっくりバージョンだけでしたから、哀愁のこもったメロディが胸に迫ります。二回目は楽器も加わり、早くなるバージョンですから少しにぎやかでしたが、それでもユキちゃんの言った通り、都もうでの曲のようなよろこびではありません。

ふしぎなことだなと思わずにはおれませんでした。何が始まるのだろう。

ピーター先生が、風の教会が建つ「新しい時」を語っておられる時のことです。私の内に新しい時とは「主のかなしみをかなしむ時だ」という自分でも信じられない思いがわき上がって来ました。

初期のときあかしに、

わたしのよろこびをよろこび
わたしのかなしみをかなしむ者であれ

というようなものがたしかにありました。私はとっさに「わたしのかなしみをよろこびなさい(の間違い)ではありませんか」と問い返したことを思い出します。聖書も主のこともよく分かっていない時のときあかしですが、「主のかなしみ」とは十字架だと思ったから、

私が十字架をよろこび感謝することを主が願っておられると思ったのです。しかし「かなしみをかなしむ」というときあかしは間違いではないのですが、よく考えないままに、今まで来てしまいました。

いやし礼拝の中で突然私に迫って来た「主のかなしみをかなしむ時」というのは、さらに信じがたい言葉となりました。

これまではわたしのよろこびをよろこぶ時であった
今からは わたしのかなしみをかなしむ時である

これが新しい時。

ピーター先生はメッセージの中で繰り返し「全き愛が現される時。十字架のあがないが現される時」と語っておられました。

私は考えました。主のかなしみをかなしむというのは、文字通り「悲しむ」のではない。

イザヤは「彼は悲しみの人で病いを知っていた」と言います。主は悲しみの人だったから、人の病いを知ることができました。病いを知るとは、自分の身に負うことだと思います。主が病いを負い、病いそのものとなられた。それは人の病いをいやし、人を病いから解き放つためです。主が「知る」と言われる時は、解決の時だからです。

主は悲しみの人というの、主は愛の人、哀しみの人、愛そのもの、哀れみそのものと言うことができるでしょう。主が愛であられることも、病いを知って下さることも、主の十字架が愛そのものであるからです。

主のよろこびはやはり十字架にあると思います。主の十字架によってゆるされ、いやされて生きるよろこびを知った私たちは十字架とそのいやしをよろこびます。これまでは十字架によってもたらされたものをよろこんで来ました。主のよろこびをよろこんで来ました。

しかしこれからは、主のかなしみをかなしむ。主の十字架のあがないが、よろこびを知った者を通して地に現される時が来た。自分のよろこびはもういい、主のかなしみ — 主の十字架の願いを自分の願いとして応える。主の十字架のあがないを全地に伝える働きをする時が来たということだと思います。風の教会はその働きをする拠点とされるのでしょう。

さんびも新しい時に入ったのだと思います。主のよろこびをよろこぶさんびから、主のかなしみをかなしむさんびへ。「主の宮の基礎をすえた時」のさんびは、主のかなしみをかなしむさんびの第一号なのかもしれません。

このいやし礼拝の朝、私は「白いハトは永遠から始まった」と語られました。

白いハトは永遠から始まったのである
永遠とは十字架から始まるから永遠である

永遠の中に十字架という一時点があるのではなく、十字架の中に永遠があり、十字架から永遠が始まっているということですが、知性では受けつけがたいものです。しかし、私たちはこれが真実だとうなずくものがあります。十字架の力とあがないの愛を知るからです。

主のかなしみをかなしむ時というのは、キリストの十字架の力が現される時なのだと思います。それは、永遠が姿を現す時と言えるのかもしれませんが。主のかなしみをかなしむ。

新しい時に主の願いが成りますように。